

ネットニュースに対する誹謗中傷コメントへの 同調・拡散を促進する要因(2)

— ニュースや登場人物への態度からの検討 —

○中本朋花・佐藤加奈・中上優季菜・夏目蓮司・金井円花・向居暁
(県立広島大学人間文化学部)

目的

近年、インターネット上でのコミュニケーションが活発になる中で、誹謗中傷問題が社会問題化しており、ある対象に誹謗中傷コメントが殺到する炎上事例も増加している(山口, 2015)。このような誹謗中傷は、他者への攻撃行動としてとらえることが可能である。大淵(1987)によると、攻撃には「制裁としての攻撃」という対人機能があり、これは、不正や不当なことをした人物に対して制裁を加えることは正当であり、不正を為した者はそれに相応しい苦しみを受けとるべきだという人々の気持ちを反映するものであるとされる。つまり、攻撃対象の性質の認知によって、人々は誹謗中傷を正当であるとみなしたり、他者の誹謗中傷に同調したりする可能性があると考えられる。

本研究では、ニュースにおける誹謗中傷コメントに同調したり、それを拡散したりする要因として、ニュース記事の内容や登場人物に対する態度の影響について検討した。

方法

調査対象者 大学生および社会人 165 名のうち、回答に不備があった 7 名を除いた 158 名(男性 41 名, 女性 110 名, 不明 7 名; $M_{age}=19.74, SD=0.09$)を分析対象者とした。

手続き MS Forms によるオンライン調査を実施した。まず、ある政治家に関する実際の報道を基に作成したニュース記事を提示した。記事は、法律違反をした都議会議員が体調不良を理由に議会を欠席した上にボーナスを受理したことに対してボーナスの返還を住民が求めたことを報じている。次に、その記事への興味や重要度を問う項目、そして、登場人物に対する態度に関する項目への評定を求めた。続いて、調査協力者を 3 群に分け、記事に対する誹謗中傷コメント(記事内容に基づくコメント、記事内容に基づかないコメント、デマを含むコメント)に対してコメントへの Good 数の多さ(多: 10000, 中: 5000, 少: 2000)を操作し、Bad 数は一定(約 200)にして提示した。そして、コメントへの賛

成意思などの態度項目(6 項目, 6 段階)、コメントへ Good や Bad を押す可能性(0~10)、コメントの拡散意図などの行動項目(5 項目, 6 段階)、また、性格特性に関する項目の回答を求めた。

結果と考察

記事や登場人物に対する態度に関する項目について探索的因子分析を行ったところ、「人物の非人間化」(加害者である都議の人間の性質の否定に関する項目群)、「社会的重大性」(ニュースの重要度を表す項目群)、「被害者非難」(納めた税金をボーナスに使われた有権者の都民を非難する項目群)の 3 因子で構成されていると結論付けた。

これらの 3 因子と、誹謗中傷コメントへの賛成態度、および、コメントに Good を押す可能性との関連を、コメントに付与されている Good 数を考慮したうえで、重回帰分析を用いて検討した。その結果、「記事内容に基づくコメント」において、「人物の非人間化」が、コメントへの賛成態度($\beta=.27, R^2=.12$)、および、Good を押す可能性($\beta=.20, R^2=.14$)に影響することが示された。また、全コメントの平均値に対して分析を行った結果においても、「人物の非人間化」が、コメントへの賛成態度($\beta=.21, R^2=.06$)、および、Good を押す可能性($\beta=.20, R^2=.10$)に影響を与えていた。すなわち、誹謗中傷の対象者を非人間化することが、誹謗中傷コメントに賛成した意見を持ったり、それに対して「いいね!」することを促進したりすることがわかった。このことに関して、田村・大淵(2006)は、攻撃の対象の非人間化が、対象への配慮を低下させることで、攻撃行動が増加することを示しており、インターネット上における誹謗中傷コメントへの同調に関しても、同様のプロセスが影響していると推測される。

引用文献

田村達・大淵憲一(2006). 非人間的ラベリングが攻撃行動に及ぼす効果—格闘 TV ゲームを用いた実験的検討— 社会心理学研究, 22, 165-171.